巻頭言

2019年水難学会学術総会に参加して

アドバイザリーボード　越　智　元　郎

アドバイザリーボードとして、巻頭言の紙面をいただくことに毎回恥ずかしい思いがある。その理由はUITEMATE関係者とはいえ、子どもたちや地域の人々をUITEMATEに導く仲間の活動に直接参加できていないという、自分自身への不満からである。しかし、今回久しぶりに水難学会総会に参加し、斎藤会長をはじめ旧知の人々のお顔を拝見した結果、このような執筆の機会をいただけることを「縁」と感じる気持ちが湧いている。会場で機関誌担当の頃末常務委員のご苦労をお聞きしたことも、「微力ながら」という気持ちにつながったと思う。

今回執筆の機会をいただき、上記のように書き始めたが、「今回久しぶりに水難学会総会に参加し」という自分自身の言葉にいくつかの疑問符が付いた。それは何年前だったか、巻頭言で示すことができるような資料は手元にあるか。結果、自分のパソコンや何台かの古いハードディスクをサーフィンすることになった。

そして、「着衣泳研究会」でヒットした幾つかのPDFファイルの中に「着衣泳研究会　会報第3号平成18年10月号—第4回着衣泳研究会大会　平成18年6月10日(土)」を見つけた。さらに斎藤（研究会）会長の「14:20からは一般講演が行われました。越智元郎氏は『世界と日本の新しい心肺蘇生法指針にみる溺水対応』と『災害準備(洪水・津波対策)としての着衣泳普及』の2講演を連続で行い、特に自然災害と着衣泳との関係をわかりやすく解説しました。着衣泳の普及が大規模災害での水難犠牲者を減らす方法のひとつになりうると感じました。」とのお言葉を見つけた。上記は「着衣泳研究会」の記録であり、9回を数える水難学会出席は「久しぶり」ではなく、「初めて」であったのだ。

今回、定時総会には最後の半時間にかろうじて参加した。学術講演会は全部聞かせていただき、懇親会を楽しみ、翌日の「セミナー1 国際交流会」の後半の意見交換が始まる直前で退室させていただいた。

多くの会員の皆様はご存知かも知れないが、昨年の西日本豪雨災害で経験した岡山県倉敷市真備町や愛媛県西予市での「自宅溺水」について情報共有をさせていただくために、一般演題への応募を心に決めていた。ところが、水難学会ウェブは定期的に開いてみていたものの、会報に出た募集要項を見逃してしまった。メーリングリスト（ML）に応募方法について問い合わせの投稿をした時には、期限を1カ月も過ぎていた。このような問い合わせをMLに送ることについてはご批判もあろうし、私自身反省もしている。一方で「拾う神あり」の恩恵・幸運に浴することもあり得ることである。

結果的に、翌日の「セミナー1　国際交流会」の日本側からの話題提供の一つに取り上げていただけることになった。「催しは日本語で」という情報は入っていたものの、主要なゲストであるタイからの参加者の多くは通訳なしの日本語では難しいというお話も聞いていた（総会前に実施された「らっこねっと」での情報）。

スライドに英語を入れ、ひょっとして英語でのプレゼンになった場合に備え、英語原稿も作成した。催しまでの短期日でこれに取り組むことができたのは、2021年に東京で開催される世界災害救急医学会（WADEM）で豪雨災害での「自宅溺水」のことを紹介したいという気持ちがあったからだ。今回まとめておけば、次のステップはとても容易となるだろう。

一応の準備をして参加した今回の催しでは、タイのメンバーの中にハイレベルな通訳者がいらっしゃることに救われた。スライドに英語訳を入れたことも配布資料の英文抄録（苦労の成果）も役に立ったと思う。

初日夕べの懇親会では進行係の「救急医療メーリングリスト（eml-nc）の主催者」とのご紹介で、乾杯（「UITEMATE！」）担当の栄をいただいた。着衣泳研究会の時代に、1000人規模の救急・災害医療関係者のコンピューターネットワークでの情報交換が、すばらしい善意の人々を水難防止の活動に引き寄せたと言えるのではないか。「eml-nc」はもう存在しないが「着衣泳研究会」は「社団法人水難学会」として、着実な発展を（国際的にも）遂げている。遅まきとも言えるが、私自身が水難学会の常連となれるよう、来年の総会にも前後の日程を十分にとって参加しようと決意した次第である。